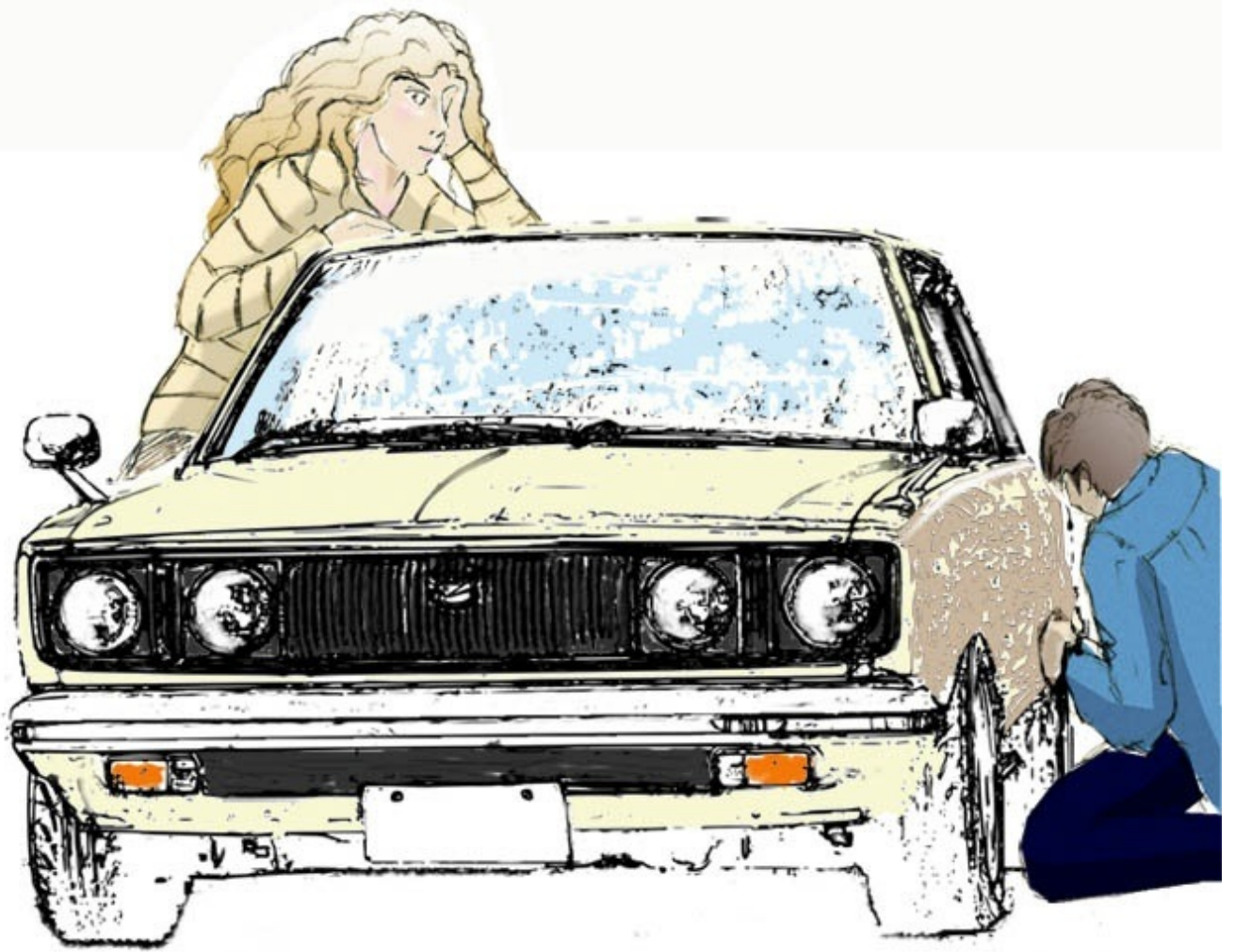


危険なドライビングマジック



真下 魚名

京都まで人を送っての帰路

この頃、私は大阪の南部に住んでいた。
京都から自宅まで、普通に走れば2時間のコースだ。

大山崎の手前付近で171号線は名神高速の下をくぐる。
大山崎と言え、羽柴秀吉と明智光秀が大決戦をやったところだが、それは関係ない。

てっきり緩やかなカーブだと思い込んでいた私は、愛車を3桁に近いスピードに乗せ、
そして軽くブレーキを踏みながら突っ込んでいった。

そこは90度に近いカーブの交差点だった。

そして、そのとき私は、生まれて初めて4輪ドリフトを経験した。

“ンママー・・・ドゥユー、ウリメンバーー♪”という映画の主題歌が私の脳裏をよぎった。

対向車線で信号待ちしていた人たちの、顔の一つ一つがスローモーションのように見えたことは
言うまでも無い。

人生の走馬灯でなくてよかった。

明石海峡に橋がかかる前のこと

学生の頃だった。

大阪から四国に渡ろうとして、途中で友人を拾い、深日港からフェリーに乗るため阪和道を南下していた私。

途中、ほぼCの形に車線が膨らんで迂回しているという標識を見落とした。

・・・おかしい、赤いテールランプじゃなくて、白いヘッドライトが近づいてくる。

どうやら対向車線に入ってしまったらしい。

“ワンダバダー、ダンダバダー、ワンダバダーダン・・・♪”

緊急事態である！

私が床までアクセルを踏み込み、そのまま直進したことは言うまでも無い。

海峡を渡る前に三途の川を渡ってしまうところだった。

高知にて

フェリーで徳島に渡り、室戸岬から高知市を経て足摺岬へ行った。

昔、高知に出入りする道は細かった。
特に、高知と愛媛の間の道は、国道という名の山道だった。

地元ナンバーのクルマに後ろに張り付かれて、私はそれでも3速オートマチックのカーリーナを無理やりシフトチェンジしながらとぼし続けた。

助手席の友人は無口になった。
どんな顔をしていたかはわからない。そんなものを見ている余裕はない。

が、しかし、それもやがて終わりのときを迎える。
私の天性の方向音痴が災いして、途中の分かれ道を間違えた。
しかもその道はすぐに行き止まりの藪だった！

急ブレーキで止まった私のクルマのルームミラーに、土煙越しに笑いながら通り過ぎる地元民の顔が写っていた。

そのとき、二度と高知には行かない、と心に誓った。

京都から大津に向かう途中

京都から大津に向かうには、1号線を東へ走るのが普通だ。

深夜、時計の針が12時を越えようとするころ、交差点で信号待ちをしていると、後ろの車からヤンキーの兄ちゃんが降りてくる。

理由は全く解らないが、どうもなにか因縁をつけにきたらしい。

私は大阪南部の血気盛んな〇〇〇（自主規制）というところの出身で、そのころはまだ学生だった。

もちろんクルマは泉ナンバー。

クルマの中から「なんじゃござあ！」とやり返した瞬間に、助手席の女の子が「逃げて！」と叫んだ。

私は基本、女子には逆らえない。ちょうど青信号だった。

急発進し、セカンドで100キロまでひっぱったあと、ちょうど直列で二台で走っていた大型トラックの隙間にクルマを突っ込んだ。

しばらくすると、さっきのヤンキーの車が、その横を猛スピードで通り過ぎていった。4人乗ってた。

ふんっ！

ヤバかった。

実は私は生まれてこの方喧嘩をしたことが無い。

それを忘れてた。

帰省途中に170号線を走っていた

片側二車線の道路で、私は右車線を走っていた。

ふと右を見ると、赤い軽自動車と同じ方向に向かって走っている・・・。
中には楽しそうに話している若い女が二人。

片側2車線、ワタシは右車線。その隣は、なに車線？

ここはどこ？わたしは誰？

こ、これは白昼夢か？

夜中 12時ごろ

洛西の9号線の支道にて。

洛西というのは京都市の西の外れの山間の新興住宅地が多いところだ。

外での食事を終えて、家族を乗せて帰宅する途中だった。

子供は、後部座席ですやすやと寝ている。

後ろからヤンキーっぽい軽自動車があおってきた。

運転しているのは女だ。

ふっ、若いな・・・。

そのまま9号線に出るまで数分間、そしてワタシのクルマを追い抜いていった。

そのクルマは、よせばいいのに今度は私の目の前でタクシーを煽りだした。

やばいぞそれは、と思い自分のクルマのブレーキを踏んだ瞬間だった。

タクシーのテールが赤くぴかっと光り、軽自動車は急ブレーキを踏んだ。

軽自動車は左のガードレールにぶつかり、跳ね返って、私の前を横切って、対向車線を走ってきたレガシーの側面にぶつかって止まった。

タクシーは何事も無かったかのように過ぎて行った。

幸い、双方の運転手はかすり傷もおっていなかったが・・・。

もうちょっとイタイ目に合った方がよかったかもね。

潮漬け

確か福井の方だった。

干潮のときだけ走れる道路が有る。

いや、道路というより単なる砂浜なのだが、”渚ハイウェイ”とかいう名前だったと思う。

そこへ先輩達が4人でレンタカーを借りて行った。

白いカローラだったらしい。

みんな免許は持っていたが、普段はバイクに乗っていたはずだ。

ようするにペーパードライバーの寄り合いである。

何を思ったのか、運転手がハンドルを海側に切ったらしい。

そして運悪く、寄せて来た波にさらわれた。

実験の結果、4人乗りでもカローラはしばらく海に浮くことが分かったそうだ。

なんとか浜に戻って、下宿のホースで水洗いし、何食わぬ顔でレンタカーを返したそうだが、多分一ヶ月もしたころには、床が錆だらけになっただろうなあ、そのクルマ。

駄洒落？

ある日の午後、自宅のマンション前の道路で、ドスンという鈍い音がした。
女性の話し声がする。

何かと思って窓を開け、下を覗き込んだらクルマが側溝にタイヤを落としていた。

運転していたご婦人が困ったようにこのマンションの住人と話している。
まあ、ご婦人がおばちゃんでも大差ないのだが。

ご近所で起こった事故なので、一肌脱ぐことにして一階までおりた。
JAF呼ぶか？

一声かけて、状況を見たら、左の前輪だけが脱落している。
これなら復旧出来る。

ご婦人からキーを拝借して、エンジンをかける。
ハンドルを思い切り右に切り、側溝のエッジにタイヤが噛む手応えをたしかめながら、
少しだけエンジンを吹かせる。

斜めになっていたクルマが少しずつ水平を取り戻した。

後日、ご丁寧なことにそのご婦人からお礼を戴いた。

なぜか袋入りの林檎だった。

脱輪でリンゴ。駄洒落か？

ロングアンドワイディングロード

彼女とドライブに行った。

行き先は、関西屈指のデートスポット六甲山。

当時はカーナビなんかなくて、道順は基本的に地図と暗記。
インターネットもなかったから、帰りの茶店を検索なんてことも出来ない。
でも、天性の方向音痴だが、動物並みの嗅覚でお店を探すのは得意だ。

道に迷った先に、それはある！

天気は晴れ。ドライビング日和。
高所恐怖症だから、がけ下が見えるワイディングは早く抜きたい。
快調に山道を駆け上がっていくクルマ。

さあ、ついで、と、クルマを降りて彼女を振り返ると、なんだかどんよりとした顔。
「どうしたの？」
「わたし、実はクルマに弱いの。」
ひえ————、しくった————。

その仕返しだろうか。
いまはワタシが、いいように操縦されている。

サイドブレーキ・スピターン

サイドブレーキを引くと同時にハンドルを切り、180°ターンするという初心者でも出来る大技である。

(残念ながらワタシは初心者ではないので、それを証明することはもはや出来ないが。)

昔、滋賀県の琵琶湖大橋には中央分離帯がなかった(今はどうか知らない)。琵琶湖大橋というのは、あの日本一大きな湖琵琶湖を横断する、巨大な橋である。

その日、赤いスターレットはいつものように琵琶湖大橋の中間点めがけてひたすらスピードを上げ、そしていつものようにサイドブレーキを引いた、らしい。

「サイドブレーキ・スピターン！」と叫んだ、かどうかは知らない。

その瞬間、ブチッ！という、聞いたことの無い音が聞こえた。

スターレットはそのまま、独楽のようにくるくると回転したことはいうまでもない。

ようやく欄干にぶつかって止まったというのは、単にラッキーでしかない。

5万円のカーステレオ

サークルの先輩が、その友人から5万円でカーステを譲り受けたら、シビックというクルマが付いてきた。CVCCの頃のである。

これはラッキーとその先輩はシビックを乗り回していた。

ある日、京都市の北部、岩倉へ抜ける道の跨道橋の上を走っていたところだ。ここは結構交通量が多い。

突然ドカンという音がして、シビックは力なくスピードを落とし、やがて止まった。

どうしたんだろう？

不思議に思って車を降りると、落ちたのはスピードではなかった。

エンジンが落ちていた。

そのあと、そのエンジンがどうなったのかは定かではない。

夜の牙

田舎道は対向車も人通も少ない。
見晴らしもよいし快適なドライブが楽しめる。しかしそれは昼間だけのことである。

ある夏の夜。

帰省して（中国地方）いつものように軽自動車を運転していた友人は、側面に鈍い衝撃を感じて急ブレーキを踏んだ。

しまった、やっちまったか、と思った。

だが対向車も追い越しも、人影もガードレールも何もなかったぞ。
不審に思った友人は、エンジンをかけたままクルマを降り衝撃のあった箇所を見た。

牙の刺さった後があった。

イノシシは急には止まらない。

ちなみに、中国地方ではこの手の事故はよくあるそうだ。

ツインエンジン

後輩は尼崎の住人で、友人は暴走族。

ちなみに、尼崎の人は高速以外の道路を”地べた”というらしい。

その友人が中古のセドリックを買って、改造を施した。

シャコタン？NO。

ニトロ？NO。

直列6気筒エンジンの2重連結。あわせて12気筒！

デゴイチの重連みたいなものである。

当然のごとく、エンジンは車内にはみ出しているのに、シフトレバーは前部座席の後方にある。

アクセルを全開にすれば、ゼロハックは4秒か！

意気揚々とガレージからクルマを出した彼は、しかしアクセル全開にすることなく、クルマを下りることとなった。

ガレージを出て本道に出る直前、「そこの車止まりなさい。」

覗き込むチャリ警官の目が点になっている。

その場で彼のクルマは没収された。

クラウンでは、こうはいかない。

みかん？

私が学生の頃買った中古車は、内装の樹脂がクロだった。

これは暗い。

そうおもった私ははずせるだけの内装をすべてはずして、
オレンジのスプレーで塗りなおした。

私は満足した。文字通り、愛車になった。

数年後、中古車屋はドアを開けたとたん絶句した。

芸術を理解しない、愚かな俗物だった。

カメ？

TSUTAYAでCDを借り、ふとみると前の交差点でクルマがひっくり返っていた。

カメ？

そう、その姿は仰向けにされて、頭で元に戻ろうとしているカメに似ていた。

でも、どうして？

たまに側面から衝突されて、横転するというのを聞いたことがあるが・・・。

周りを見回しても、ぶつかったらしいクルマはない。

横から交わる道路すらない。

一体どうしたというんだろう？

暫く見回して、私は、はたと気がついた。

そのすぐそばに電柱があって、電柱を牽索している黄色いガードのついたワイヤーが斜めにのびていることに。

あのクルマ、バックでこれに片輪だけ乗り上げたに違いない。

迷惑そうに数珠繋ぎになっている後続車も、これには文句の言いようがなかったのではないだろうか。

ライダー・キック

入社二年目の私が、当時のおきゃくさん達と、夏のテニス合宿で和歌山に行った帰りだったと思う。

帰り道はすでに日が暮れていて、堺の辺りを走っていた。

片側二車線の前方には白いセダン、その右側にゲンチャに乗った女の子。時速は多分50キロぐらい。

私はゲンチャに前を走られるのが嫌いなので、どいてくれないかなあ、などと思いながら走っていた。

と、いきなり女の子の足が伸びて、ミュールのかかとで白いクルマのボディを蹴った。しかも、その白いセダンに向かって何事か叫びながら。

事情は良く分からないが、何か気に入らないことがあったのだろう。

でも、堺って怖いところだとしみじみ思った。

以来、堺の近くは決して走らないようにしている。

怖い人

大阪の中心部で働いている。

大阪にはいろんな人が居て、そういう人とすれ違うことがある。

このところ、毎晩のように同じ交差点の角に止まっている暗い色の軽自動車がある。その交差点は、表通りから一つ二つ中に入った道にあり、工事中の覆いのせいで、見通しが悪いところにある。

大阪大空襲があって、多くの人たちが亡くなった、という過去のあるところだ。その手の噂を、ときどき耳にする。

ある晩。

たしか、22時ごろだ。

疲れた、と重い頭で、いつもと同じ道を歩いていた。

工事中の覆いが切れて、走ってくる車が無いか、右を見た、、、その時だった。

闇の中に、青白く光るうつむき加減の人の顔。。。。。。ひえ—————。

ケイタイ、見るなよ。

次兄の嫁は免許を取ってすでに30年以上。

でもいまだに高速道路が怖いという。

高速と地道があるところなら、まよわず地道を走り、
どうしても高速に乗る場合は、仕方なくという感じで料金所をくぐるのだが、
前車との車間距離を100m以上離して走行するのだと言う。

多分300mの間違いだろうけど。

これだけ車間距離をとると当然ほかの車が割り込んでくる。

するとまた、100m。

割り込み、また100m。

・・・。

こういう人がいるから、トンネルも何も無いところで渋滞が発生するのだきっと。

太平洋に波高し

義理の姉は免許を取ってすでに30年以上。

家のクルマはクラウン。

でも、一人でゴルフ場に行くときに、クラウンはでかくて面倒なので、VWのポロをセカンドカーとして購入することにした。

納車は一ヶ月後である。

さすが外車、気の長い話であるが住居が街中なので駐車場を早々と確保した。

一ヶ月後、正規ディーラーから何の音沙汰も無い。

業を煮やして乗り込むと、「いつ在庫するか分かりません。」

「一ヶ月後に納車と言ったじゃない。」

「南アフリカから輸送中なんです、太平洋が荒れてて、いつ着くか分からないとってます。」

即解約して、近くのマツダでベリーサを頼んだら、一週間で納車されたそう。

めでたしめでたし。

全部塗り替えます

私の3代目のクルマはコロナだった。
結婚して、落ち着いたクルマに乗ろうと思った。

ある日ドアをこすってしまった。
まだ比較的新しかったので、塗りなおしてもらおうかと思いディーラーに行った。

「いくらかかりますか？」

「40万です。」

聞き間違いか？

「ドアの上半分だけですよ。」

「全部塗りなおしますから40万です。」

「上半分でも？」

「40万です。」

私は急にクルマの傷が気にならなくなったと同時に、
トヨタなんか買うもんかい！と心に誓った。

愛国車

ある日うちの娘が言いました。

「パパ。トヨタのベンツって高いの？」

父さんは、そんなお前が大好きだよ。